
雪の降る森

水乃霰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の降る森

【Zマーク】

Z0099C

【作者名】

水乃霰

【あらすじ】

一人深い森の中にはすむ少女が、ある雪の日少年と出会いことで感情に変化が生まれます。自分の能力を怖がられるのではないかと不安を感じる少女に少年は…

(前書き)

恋愛ものでは無いですが、ほのほのとした雰囲気が出せていれば…。
と思います。

深い深い森の中、人目に触れることがないその場所で、一人の少女が住んでいました。

少女は黒猫と共にひつそりと暮らしています。

少女の一族は代々不思議な力をもち、そのせいで、普通の人達とは相容ることは叶わなかつたのです。

それでも少女は淋しいとは思いませんでした。

今はもういない母達も、ずっと一族だけで生きて來たのです。

自分もきっと同じなのだと、幼い頃に気づいた少女は、この森と、猫さえいればそれでいい、しょうがない、とそう思っていました。

ある日、少女の住む森に雪が降りました。

少女が雪を見るのは初めてで、それが何か解らぬまま洞窟の中から見つめていました。

” きれい… ”

しんしんと降り続く雪を見つめ、少女はその白いものに触つてみたくなりました。

そおっと手を伸ばし、地面に積もつた雪にさわった少女は驚いて手を戻します。

” つめたい…。これはなんだか… ”

そして白くなつていいく自分の世界を見つめているうち、少女の中にある気持ちが芽生えます。

”さみしい”

長い間忘れていた感情が…少女の胸を満たします。

そして、その気持ちを紛らわせようと、冷たい雪の降る中森を歩き始めました。

森の中をじっくり歩いても、一面の白以外なにもみつかりません。

少女の腕の中にある黒猫にも白い雪が舞い降ります。

少女はは知らず知らず深い森の奥から、入り口の近くまで来ていました。

田をじらすと前から青い色が近づいて来ます。

” わりのこりだ… ”

少女は嬉しくなりました。

” さみしくなくなるかな？”

少しすると、その青い色は服の色だとわかりました。

その服を着ていたのは、少女と同じ年頃の少年でした。

少年は少女を見て尋ねます。

「ひさな森の中でどういたの？」

「……」

「僕はね、雪を見るのが初めてだったから、嬉しくてこんな所まで
来ちゃつたんだ」

「さみしかつたの」

「え…？」

「さみじへへ、さぢしてたの」

「そつか、遊び相手を捜してたんだね」

「……」

「なら僕と一緒に遊ぼうよ」

「…」

少女には、遊ぶといつてがどんなことなのか、解りませんでした。

それでも、淋しくなるのならどうなさきました。

「僕、ハルキっていうんだ。君は？」

「わからない」

何年も一人で暮らすうち、少女は自分の名前を忘れてしまつていきました。

誰も、少女の名を呼ぶ者がいなかつたからです。

「わからなーの……へじゅあ、僕がつむりあがるよ。…今日の記念に

『ユキ』っていいや。

「ユキ?」

「うそ、この降っている雪にちなんで」

「…うん。いい」

「よかつたあ。じゃあ君は今日から、ユキ」

「うそ。ユキ」

「ユキ、遊び」

それから2人はとても長い時間遊んでいました。

”樂しい”

ただそれだけが2人の頭と心にありました。

けれど、もともと寒い場所ではないので、2人は寒さに慣れていません。

すこしづつ、2人の顔は赤くなり、手はかじかんできます。

少女は、ふと思いつきます。

”あたたかいたべものを”

そう念じただけで、2人の目の前には湯気を立ておいしそうな食べ物が現れました。

少女の一族はこの力で生きてきました。

けれど、この力を人前で使えばたちまち人々は離れてゆきます。

自分たちにない力を使える少女の一族に嫉妬し、畏怖したからです。

少女はそれらを出してから、思い出します。

昔、母達がいっていたことを。

『森をでることがあつたとしても、人前でだけは、力を使ってはいけないよ』と。

”ハルキもはなれていっちゃう?”

少女は、それまで楽しかった気持ちもしほみ不安になりました。

「ゴキ…すゞ…」なんに一杯暖かいものを出せるなんて

「…はなれていかない?」

「なにいつてるの?離れてなんて行かないよ」

「こわくない?」

「うん。怖くない」

「きもちわるくない?」

「全然。だって、この力も含めて雪なんでしょう?それでいいんじやないかな」

「…うん」

2人はその後、暖かい食べ物を仲良く食べました。

そして、体が暖まつた頃には、空が暗くなり始めていました。

「雪、僕らそろ帰らなきゃ。でも、明日また会へるか？」

「ほんと？」

「うふ。だから、雪もきて」

「わかった」

「それから、今日はありがとう

「ありがと？」

「うふ。嬉しい気持ちを伝えたいくときせ、ありがとうってこうんだ

「じゃあ、ユキも、ハルキにありがと

「そつか。よかつた。それじゃあ、また明日」

「うん。またあした」

雪をみて淋しくなったのは、雪が少女と同じように、何も持たないモノだったから。

けれど、少女には『雪』という名前と、大切な友達が出来ました。

春樹と別れて1人になってからも、もう少女は淋しくありません。

外を見上げればまだ雪はしんしんと降りつもつしていました。

end .

(後書き)

いよいよで読んで下せりて、ありがとうございました。
水乃霞拌

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0099c/>

雪の降る森

2010年10月9日00時46分発行